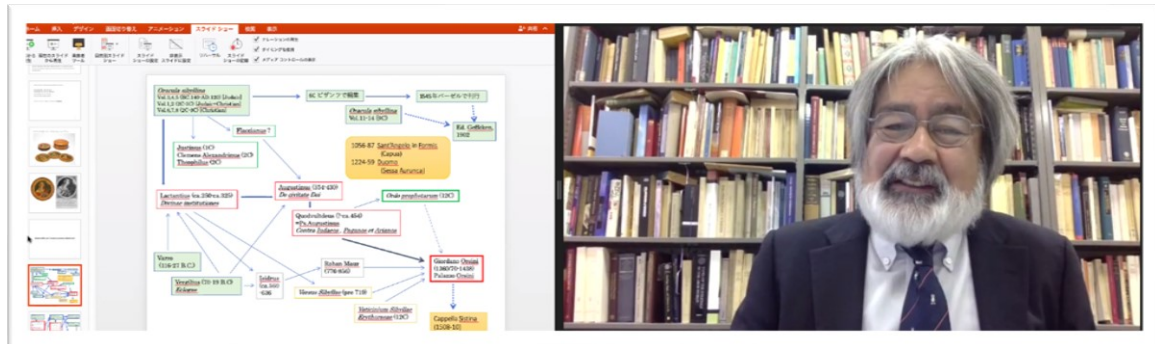


第 59 回シェイクスピア学会 特別講演

シェイクスピア時代のシビュラ図像集について

専修大学教授 伊藤博明



「シビュラ」または「シビュッレー」とは、古代ギリシアにおいてアポロンの神託を狂乱状態で告げる巫女たちの一人でした。シビュラの名声が高まるにつれて、さまざまな土地と結びつけられて「シビュライ」複数化され、ローマの文人のウァロは、ペルシア・リビア・デルポイ・キメリア・エリュトライ・サモス・クマエ・ヘレスポントス・ピュリギア・ティブルの 10 名のシビュラの名を挙げています。ローマ社会においては実際にシビュラの託宣が蒐集され、この託宣集はカピトリウムの丘のユピテル神殿に保管され、戦争、天変地異、疫病の発生などの際に参看されました。一方、前 2 世紀中葉から 3 世紀初頭にかけて、のちに『シビュラの託宣』として編纂される、ギリシア語によって記されたユダヤ教＝キリスト教的文書群が成立しています。

初期キリスト教の教父たちの中には『シビュラの託宣』からの引用が散見されますが、後代への影響という点でとくに重要な教父はラクタンティウスとアウグスティヌスです。アウグスティヌスは、『神の国』において、この託宣集の中に含まれていたアクロスティック、すなわち、各行の最初の文字を繋げると「イエス・キリスト、神の子、救世主」となる文章をラテン訳して引用しており、この箇所とともにシビュラの名前は中世に伝えられていきました。そして、長らくアウグスティヌスに帰されていた、クウォドウルトデウス

の『ユダヤ教徒、異教徒、アリウス派駁論』では、両教父に基づきながら、シビュラたちが採り上げられ、その託宣が詳しく紹介されています。その箇所はクリスマスの説教において読まれるとともに、中世後期に成立する典礼劇『預言者たちの行列』の成立に影響を及ぼしました。

15世紀初頭に、ローマのパラッツォ・オルシーニの部屋の壁面に、12人のシビュラが12名の預言者と対に描かれました。この壁画自体は破壊されてしまいましたが、ヨーロッパの幾つかの図書館に、各シビュラの名称と託宣を伝える『キリストの受肉についての12人のシビュラの予言』と題された写本が残されています。そこでは、上記のウァロのリストの10人に、エウロパのシビュラとアグリッパのシビュラが新たに付加されていました。

イタリアでシビュラの図像集が初めて印刷されたのは、1481年にローマで刊行された、フィリッポ・バルビエーリの『聖なる博士たち、ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致』の中の「シビュラたちと預言者たちのキリストについての予言」においてです。この図像集は大きな成功を収め、当時の美術作品に対しても深い影響を及ぼしました。

16世紀に入っても、バルビエーリの著作はテキストが増補されて再刊されました。1505～10年にヴェネツィアで、『ここに4つの小論が含まれる：「聖なる博士たち、ヒエロニムスとアウグスティヌスの不一致」、「キリストについてのシビュラたちの予言、各々は適切な図版を伴う」……』が現れました。本書は1510年頃にオッペンハイムで再刊され、また、1514年頃には同じくオッペンハイムで、『シビュラたちの託宣についての小論』として刊行されています。

『シビュラの託宣』が初めて印刷されたのは1545年になってからで、編者はアウクスブルクのクストゥス・ベトゥレイウスです。彼はその「序文」において、その信憑性を疑う者たちに対して、それがキリスト教についての予言と一致することを強調しています。続く1546年に、セバスティアン・カステイリヨは、バーゼルの出版者オポリヌスに請われて、『シビュラの託宣』のラテン語訳を上梓し、さらに1555年に、新版の『シビュラの託宣』をラテン語訳とともに刊行します。

そして1599年に、パリで浩瀚な『シビュラの託宣』ギリシア語・ラテン語版が刊行されました。刊行したのはヨハネス・オプソポエウスです。オプソポエウスは「序文」において、文献学者らしく、託宣の語彙やその用法の点から、また内容の点から、この託宣集の真正性について疑義を提出していました。

一方、この書物の刊行から2年後の1601年にユトレヒトで、新しいシビュラ図像集が——同書から着想を得て——編まれて出版されます。それが、クリスピン・デ・パセの『12人のシビュラのきわめて優雅な図像集』です。そこに収められた12人のシビュラはすべて、円いメダイヨンの中に半身像の姿で描かれ、手に書物（託宣）、穂の束、剣、羽根などを持ち、メダイヨンの外側の円環の中にはシビュラの名前とともに別名、生地、両親の名前などが記されています。そして、肖像の下には、上述した「広く知られている6行詩」がラテン語で記されています。

シビュラの肖像の下に置かれた6行のラテン語詩は、オプソポエウス版『シビュラの託宣』の中に見いだすことはできません。その典拠は、上述した『ここに4つの小論が含まれる』および『シビュラたちの託宣についての小論』の各シビュラに帰されたラテン語詩に求められます。デ・パセのシビュラ図像集は、いくつかの典拠をもつハイブリッドな性格ともつとともに、とりわけシビュラの肖像表現という点では独創的で、きわめて完成度の高い作品でありました。

続いて、デ・パセのシビュラ図像集に影響を受けた3種のシビュラ図像集が、いずれもパリで刊行されました。各々の制作者の名前は、トマ・デ・レウ、ジャック・グラントム、ピエール・フィレンですが、彼らに共通した特徴は、デ・パセのように、各シビュラは円形の中に描かれ（フィレンの場合は楕円形）、その周りに各シビュラを明示するキャプションが記されていますが、図像の下にはラテン語による4行詩が置かれていること（デ・パセに6行詩でした）。また、シビュラの順序もこれら3人はデ・パセとは異なっています。

デ・パセのシビュラ図像集の影響は、スペインにまで及び、1621年にクエンカで、バルタサル・ポッレーニョ・デ・モラによって、『異教徒たちの間でわれわれの主、キリストについて予言した、12人のシビュラの託宣』が刊行されます。取り上げられた12人のシビュラの名称と順序は、デ・パセの『12人のシビュラのきわめて優雅な図像集』と同一です。

デ・パセのシビュラの図像集の影響は英国にも及びました。1620-25年頃にロンドンできわめて類似した『12人のシビュラ図像集』が刊行されましたが、銅版画を制作したのは、シェイクスピア著作集の最初のフォリオ版（1623年）の冒頭に掲げられた、シェイクスピアの肖像画の作者、マーティン・ドルーシャウトです。

ドルーシャウトの図像集は12枚のシビュラの図像だけから構成されており、円形のメダイヨンの内部に描かれた半身像はすべて、デ・パセのシビュラ図像を正確に模したもので

す。またメダイヨンの円環に記されたラテン語の文言もデ・パセのものと同じです。一方、シビュラ像の下に記されていたラテン語による6行詩は英語で表されていますが、それは正確な翻訳というよりも自由な翻案に近いものです。また、この英語版においては円環のラテン語文の外側に、英語による文言が付加されています。

また、同時代の英国には、きわめて興味深いシビュラ図像集がマニュスクリプトとして残されています。それはトマス・トレヴィリアン、あるいはトレヴェリヨンが作成した、彩色挿絵入りの『雑録』（1616年制作）に含まれています。12人のシビュラは1ページごとに、円形内に半身像の肖像で表され、その形姿は明らかにデ・パセの図像集に依拠しています。シビュラの下には6行詩が英語で記されていますが、その文言はド・パセの図像集に記されたラテン語とは異なり、また、ドルーシャウトの図像集に記された英語ともまったく異なります。

デ・パセの図像集の影響は、英国の邸館の中に描かれたシビュラ像として残されています。その一つはスコットランド、バーティスランドのメアリー・サマヴィル邸に残されている6枚のシビュラ画で、デ・パセのラテン語版が参照された可能性が高いと思われます。また、スコットランドのウェスター・リヴィランズ邸からは六体のシビュラ像が発見されました（1629年制作）。シビュラが半身像で描かれているのは、デ・パセとドルーシャウトのシビュラ図像集と同じですが、形姿はまったく異なります。各図像の下には英語の6行詩が記されていますが、その文言はトレヴィリアンのものと共通しています。しかし仔細に検討してみると、ウェスター・リヴィランズ邸が伝える詩文のほうが、それ以前に制作されたトレヴィリアンの詩文よりも文意的には適確なのです。

さらにこの詩文は、イングランドのチェイニー・コート邸に見いだされます。シビュラに付された詩文の内容は、トレヴィリアンのものとほぼ合致しており、しかもウェスター・リヴィランズ邸のものに一致しています。以上のことから推測するのは、当時の英国には一つの共通の源泉となる、英文のシビュラ集が存在していたということです。

最後に、木製のトレンチャーのセットに描かれたシビュラ像について二例を紹介します。その一つは1888年6月28日のロンドン考古協会例会においてクックセイが展示したセットです。12枚の各々には着色されたシビュラが描かれ、その周りにラテン語でシビュラの名称が、さらにその周りには英語で銘文が記されていました。それらの名称も銘文も、ドルーシャウトのシビュラ図像集のものと同じです。

もう一つの例は、ケンブリッジ大学のフィッツウィリアム・ミュージアムに所蔵されている 12 枚のセットに見いだされます。各々のトレンチャーは、きわめて精巧にドルーシャウトのシビュラ図像集を摸倣しており、美しく彩色されています。このように、ドルーシャウトのシビュラ図像集は、トレンチャーを通して 17 世紀英国のマテリアル・カルチャーの一翼を担ったのです。